

■吉松隆／鳥は静かに…

吉松隆（1953-）は若者を中心に多くのファンをもつ、クラシック系の現代作曲家としては希少な存在である。いわゆる「現代音楽」、つまり前衛的な音楽を撲滅しようという過激な主張のもと、調性やモードを使った叙情的な作品を書いてきた。鳥は吉松の創作の初期から、ずっと取り上げられてきたテーマで、鳥にこだわるのは人間以外で歌う先輩であり、また、翼を広げ飛翔するイメージに惹かれているのだという。

「鳥は静かに…」は 1997 年の夏から 98 年の春にかけて作曲された。弦楽アンサンブルのための小品で、もともとは亡くなった仲間を追悼するために委嘱された曲だったことから、一羽の鳥の死を仲間の鳥たちが静かに囲んでいる悲歌として構想している。国内外のオーケストラが演奏していて、吉松作品の中でも再演数の多い 1 曲である。

ヴィオラによるミの保続音にのせて、澄んだ響きの短いモチーフが弱音器付きのヴァイオリンで奏でられる導入部に続いて、アンダンテ・トランキロとなり、今度は 2 音で揺れるヴィオラの上で導入部のモチーフが発展し、息の長い高揚をみせる。ヴァイオリンの独奏が哀感のこもったメロディを奏でるところからが次のセクションで、同じメロディが幅広い音域のハーモニーに支えられながら繰り返される。ふっと思い出のシーンがよみがえったかのようなアダージョ・アマービレののち、再び先ほどのヴァイオリン独奏のメロディが今度は合奏で再現され、透明な抒情を織りあげていく。最後にテンプ・プリモで、導入部が回想されて、静かな余韻を残して終わる。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成：弦五部

※スコア上の表記